トンプソンの行為論における意図の捉え方

村井忠康（沖縄国際大学）
西日本哲学会第71回大会 研究発表
2020年12月5日（土）

1

1. はじめに

2

内容

1. はじめに
2. 意図の展開説としてのトンプソンの行為論
3. トンプソンの行為論内部の緊張
4. 行為内意図としての進行中の行為
5. おわりに

3

2. 意図の展開説としてのトンプソンの行為論

4

行為による行為説明 vs. 心理による行為説明

- 行為による行為説明
  私が卵を割ったのは、私がオムレツを作っているからだ。

- 心理による行為説明
  私が卵を割ったのは、私がオムレツを作りたいからだ。

ここでいう説明とは、意図的行為の理由を挙げること（合理化）である。

5

従来の行為論に対する トンプソンの診断

- 行為の哲学者たちは、行為の真正の説明として認められるのは心理による説明だけであると考えがちである。
- しかし、その背景には次の二つの誤った前提がある。

(1) 意図的行為のアトム的な捉え方：
合理化の文脈で考えられるかぎり、意図的行為は「点状の」ユニット（ある時点において起きる出来事）として考えよい。（Thompson 2008, p. 91）

(2) 実践的な心的事象の静止的な捉え方：
行為を合理化する実践的な心的事象（欲求や意図など）は、行為のような「運動（kinesis）」ではなく「静止的状態（stasis）」である。
（Thompson 2008, p. 91, pp. 133-4）

6

行為による行為説明の一般化（1） ― アトム的見方に抗して

- 行為による行為説明は、進行中の行為、つまりプロセスとしての行為による説明である。
- 被説明項は完結した行為でも進行中の行為であってもよく、さらには心理的事象であってもよい。つまり、行為による行為説明は行為による説明として一般化できる。

➢ 私が卵を割ったのは、私がオムレツを作っているからだ。
➢ 私が卵を割っているのは、私がオムレツを作っているからだ。
➢ 私が卵を割りたいのは、私がオムレツを作っているからだ。

- 被説明項ではなく説明項（理由）としての意図的行為の重視

7

行為による行為説明の一般化（2） ― 実践的な心的事象の静止的捉え方に抗して

- 行為の理由として取り上げられてきた実践的な心的事象、たとえば欲求や意図は、静止的事象という意味での状態ではなく、進行中の行為とともに未完結的事象として運動のカテゴリーに属する。

- つまり、行為の理由となる欲求や意図のなかには、進行中の行為と同じく、完結した行為への展開として見ることができるものがある。

- こうして、行為による説明は、未完結的事象による説明へと一般化できる。

8

「素朴行為論」という名称について

- トンプソンは、自身の行為論を「素朴行為論」と称している。
- 彼は行為による説明を、心理による説明よりも日常的に頻繁に見られる前哲学的な説明と考えている。
- 対して、心理による説明は、行為の哲学者たちが作り出した説明という意味で「洗練された説明」と呼ばれる。
- そのうえで彼は、素朴な説明のほうが洗練された説明に対して理解可能性の点で先行すると主張する。
- 「素朴行為論」という名称はこの主張から来ている。
- しかし私は、彼の行為論を「意図の展開説」と呼ぶことにしたい。

9

意図の展開説

- 以下では、簡略化のために、行為へと展開する実践的な心的事象を意図に絞って論じることにする。
- トンプソンが描いている「意図から行為への展開」は具体的には次のようになる。

私はオムレツを作ろうと意図している。	意図としての「行為」	未完結的事象
↓		
私はオムレツを作っている。	プロセスとしての行為	未完結的事象
↓		
私はオムレツを作った。	出来事としての行為	完結的事象

10

潜在的行為としての意図

- トンプソン自身は、行為に先立つ意図を「行為」と呼んではいない。
- しかし私は、トンプソンの展開説が理解可能なものであるなら、意図を「行為」と呼べるような意味がなければならないと考える。
- これはちょうど、蝶へと変態する芋虫が潜在的な蝶と言える意味があるのと類比的である。（Cf. McDowell 2011, Russell 2018）
- したがって、トンプソンの行為論が展開説と呼べるかぎりにおいて、彼の考える先行意図は潜在的行為である。

11

3. トンプソンの行為論内部の緊張

12

- しかし、トンプソンの行為論には、展開説を維持しがたいものとする緊張がある。

（1）説明項としての意図的行為という考えを正当化する議論において、彼は、プロセスは出来事の系列へと還元されるという考えにコミットしている。

（2）他方で彼は、プロセスとしての行為を出来事としての行為から区別するとき、前者を意図へと事実上同化している。

- （1）は進行中の行為と意図の連続性を断ち切ってしまい、（2）は完結した行為と進行中の行為の連続性を断ち切ってしまう。
- 以下、順にその事情を見てゆく。

13

3.1 初期区分論法

14

基礎行為はあるか？

- オムレツ作りのような意図的行為は、卵を割ったり卵を溶いたりといった意図的行為を部分として含む全体である。この部分全体関係は、手段目的関係でもある。

➢ 私が卵を割っているのは、オムレツを作っているからだ。
➢ 私はオムレツを作るために卵を割っている。
➢ 私は卵を割ることによって、オムレツを作っている。

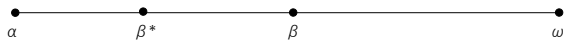
- しかし、説明項としての行為というトンプソンの見方は、目的となる行為には適用できても、手段としかなりえない行為、つまり、目的論的に基礎な行為には適用できないように思われる。
- トンプソンは、この疑念に対して、基礎行為の存在を否定することによって応じる。（Thompson 2008, pp. 107-8）

15

初期区分論法（1）

Initial Segment Argument

- 基礎行為の候補として、私がαからωまで意図的に石を押したという行為を取り上げる。
- このとき、私は、αとωの中間地点βまで石を意図的に押したのでなければならない。
- すると、私がαからβまで意図的に石を押していた、また押したのは、αからωまで石を押していたからである。
- もしそうなら、私がαとβの中間地点β*まで意図的に石を押していた、また押したのは、私がαからβまで石を押していたからである。



16

初期区分論法（2）

- したがって、最初は基礎的と思われた意図的行為であっても、それを目的とする手段的行為がその部分として見出せる。
- この手続きは無限に適用可能であるので、より基礎的な意図的行為が元の意図的行為の初期区分として見出され続ける。
- よって、手段でしかありえないという意味での基礎的な意図的行為は存在しない。

17

ホーンズビーの反論

Hornsby (2013)

- 行為論におけるプロセス（進行中の行為）の重要性を指摘した点でトンプソンは正しい。
- しかし、初期区分論法にはこの指摘を台無しにする前提がある。
- 基礎行為の候補の部分として次々と見出される「より基礎的な行為」は、元の行為と同じく、完結した行為、つまり出来事である。
- したがって、「私はある地点まで石を押していた」のような進行形の未完結相言明が使われているとしても、それが主題とする進行中の行為は、起きてきた出来事の系列である。
- このような還元的理解では、行為におけるプロセスの独自性は失われてしまう。

18

トンプソンは応答できるか？

- トンプソンは、この反論を認めないだろう。
- 基礎行為の候補の時間的部分として彼が考えているのは、現実に切り出された自立的な部分ではなく、思考において切り出される可能的部分である、と彼は言うだろう。
- しかし、彼が基礎行為の候補へと持ち込んでいる目的論的構造が、オムレツ作りのような意図的行為に典型的に見出される目的論的構造と同種のものであることを考えると、彼は初期区分論法において、基礎行為の候補の時間的部分を現実の自立的な部分として捉える見方にもコミットしていると言わざるをえない。（Small 2019）
- オムレツ作りの手段的部分である卵割りは、自立的な出来事（としての行為）でありうるからである。

19

進行中の行為の還元的理解の代償

- このコミットメントがあるかぎり、プロセスとしての行為と意図の連続性は維持できない。
- プロセスとしての行為が出来事の系列にほかならないのあれば、それは未完結的事象としての性格を失ってしまうからである。
- そうなると、トンプソンは、意図はプロセスとしての行為（進行中の行為）とともに未完結的事象のカテゴリーに属すると主張できなくなる。

20

3.2 未完結的事象の一般性

21

プロセスとしての行為の意図化

- プロセスとしての行為の還元的理解がトンプソンの暗黙のコミットメントだとすれば、プロセスとしての行為を意図へと同化する考え方は彼の公式見解であると言ってよい。

> 「私はAしている」は、「私はAしようと意図している」と寸分違わず「一般的」である。真正の個体への移行は、「私はAした」において初めて生じる。（Thompson 2008, p. 137）

- つまり、「私はオムレツを作っている」という行為判断は、プロセスとしての行為を主題とするが、それはまだ個別的行為（個体の一種）ではない。
- 真正の個体としての行為（出来事）は、「私はオムレツを作った」という完結相言明においてのみ主題となる。
- プロセスとしての行為の未完結性は、意図の一般性によって捉えられる。

22

個体性の度合い

- しかし、このような捉え方は、プロセスとしての行為の理解から始めて意図を静止的状態ではなく運動の一種として捉えるトンプソン自身の立場と衝突するように私には思われる。
- たしかに、意図も進行中の行為も、完結には至っていない点で、完結した行為ほどの個別性は備えていない。
- しかし、意図から完結した行為への展開を、一般性から個体性への度合いのない移行として考える必要はない。
- トンプソン自身認めているように、「プロセスの進展、展開あるいは「未完結さ」はさまざまなタイプや度合いを示すものであると理解されなければならない」。（Thompson 2008, p. 132）

23

進行中の行為の「意図化」の代償と別の可能性

- 進行中の行為としてのプロセスに意図と同様の一般性を認めるかぎり、プロセスは、完結した行為としての出来事との連続性を失ってしまう。
- しかし、進行中の行為の「意図化」はいかなる意味でも間違いなのだろうか。
- 次節では、トンプソンとは違った仕方で進行中の行為を意図と同一視する見方ができると論じる。

24

4. 行為内意図としての進行中の行為

25

トンプソ自身の用語法

- 行為におけるプロセスと出来事の区別を捉えようとして失敗した結果が、事実上、進行中の行為の「意図化」であるというのが、前節最後での私の指摘であった。
- しかし、トンプソン自身の用語法で言うなら、意図（あるいは欲求）と行為は明確に区別されている。
- だからこそ彼は、心理による行為説明ではなく行為による行為説明を重視する素朴行為論を提案できた。

26

二つの説明方式の対比の弊害

- しかし、心理による説明と行為による説明をきっぱりと区別したうえで、後者の優位を唱えることは、行為による説明を心理による説明としても見る選択肢を閉ざしてしまう。
- つまり、完結した行為へと次第に展開するプロセスとして進行中の行為を理解しながらも、進行中の行為自体を意図としても理解する選択肢が、トンプソンには閉ざされている。

27

トンプソンの譲歩の意味

- たしかにトンプソンは、行為による説明（素朴な行為説明）が心理による説明（洗練された行為説明）を含意することを認めている（Thompson 2008, p. 118）。

私が卵を割っているのは、オムレツを作っているからだ
→ 私が卵を割っているのは、
オムレツを作ろうと意図しているからだ
（or 作りたいからだ）。

- しかしトンプソンは、この場合の意図を、行為に先立つ意図がそのままのかたちで残存している程度のものとしてしか考えていない。

28

行為内意図の導入

- 問題の含意によって示唆される意図は、先行意図というよりは、しばしば「行為内意図」と呼ばれるものであろう。(Falvey 2000)
- ここで、行為による説明と心理による説明はきっぱり分けられるものではないと考えるなら、進行中の行為による説明は、先行意図による説明を含みうるような一般化を待つまでもなく、それ自体で、行為内意図という心理による説明であるだろう。
- むしろ、「私はオムレツを作っている」のような進行形の行為言明は、行為内意図を表現するのにふさわしい言明とさえ言える。（McDowell 2010）

29

行為内意図としての進行中の行為

- ただし、いま問題にしている意図を「行為内意図」と呼ぶのはミスリーディングかもしれない。
- 意図の展開説のなかにそれを位置づけるなら、「行為内意図」と呼ばれている意図は、潜在的行為としての先行意図から展開してきたものであり、したがって、それは進行中の行為そのものであると考えられるからである。
- 「行為内意図」という表現を使い続けるとすれば、「内」という表現は同一性を意味するものとして解釈されなければならない。（McDowell 2011）

30

5. おわりに

31

- トンプソンの行為論は、先行意図と完結した行為（出来事）のあいだで進行中の行為（プロセス）の身分に緊張をもたらしていた。
- この緊張は、進行中の行為そのものを行為内意図と同一視することによって解くことができる。
- しかし、そうすることは、トンプソンの素朴行為論から「素朴」という形容を奪うことにもなるだろう。
- 素朴な行為説明（行為による説明）は、洗練された説明（心理による説明）に先立って理解できるという主張こそ、この形容の根拠だからである。
- しかし、意図の展開説自体は、二つの行為説明のどちらに優位を置くかという選択を迫られる必要はない。

32

参考文献

Falvey, K. (2000) “Knowledge in Intention” in *Philosophical Studies* vol. 99. no. 1: 21-44

Hornsby, J. (2013) “Basic Activity” in *Aristotelian Society Supplementary Volume* vol. 87, issue 1: 1-18

McDowell, J. (2010) “What is the Content of an Intention in Action?” in *Ratio* vol. 23, issue 4: 415-32

———— (2011) “Some Remarks on Intention in Action” *The Amherst Lecture in Philosophy* 6: 1-18 <http://www.amherstlecture.org/mcdowell2011/>

Russell, D. (2018) “Intention As Action Under Development: Why Intention is Not a Mental State” in *Canadian Journal of Philosophy* vol. 48, no. 48: 742-761

Small, W. (2019) “Basic Action and Practical Knowledge” in *Philosophers' Imprint* vol 19, no. 19: 1-12 <http://hdl.handle.net/2027/spo.3521354.0019.019>

Thompson, M. (2008) *Life and Action: Elementary Structures of Practice and Practical Thought* (Harvard UP: London)

33